

# 古事記傳

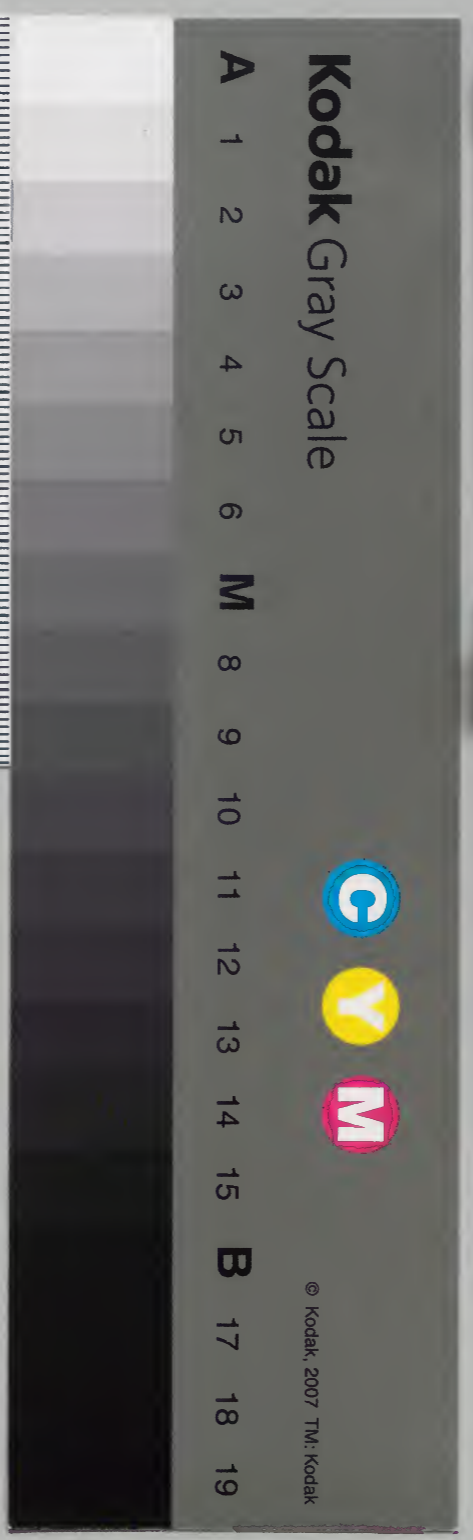
和書  
一〇五二一號

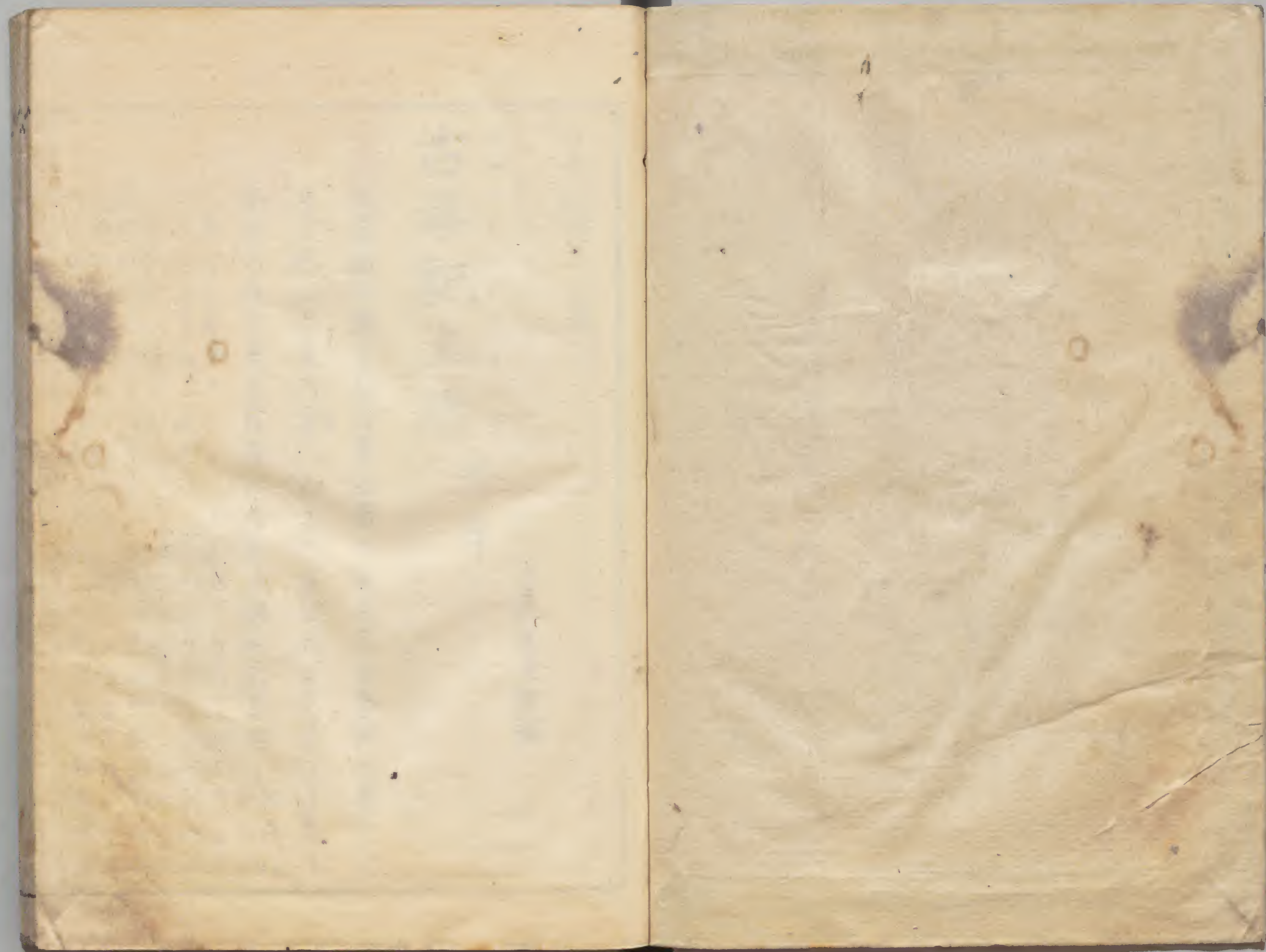
和書門類	一〇五二一號
函號	七九
架冊	四八

內閣文庫	和書類
一〇五二一號	
四八冊	
三七函	

內閣文庫	番號	和 10521
	冊數	48 ( 5 )
	函號	137 1

內二六八二號





消印

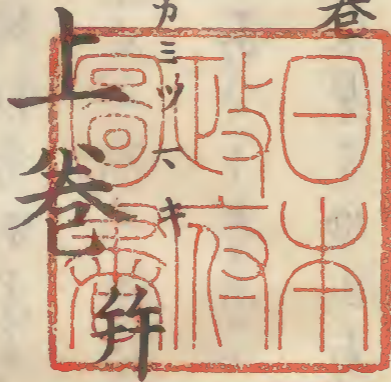
古事記傳二之卷

内 一 二 六 八 二 號

本居宣長謹撰

フルコトブミカニツキ

# 古事記



## 序

此標題此處は古事記序や何れして古事記上卷やい

あつては本文乃首にあらまを合せくあつて書て

本文のほゞ免は畧けるなり諸本みか同し并序は

序とも序ヲナラブやも免ども共了此方乃もの

ひごまり何れは此ちりかたり古言みは訓あつ

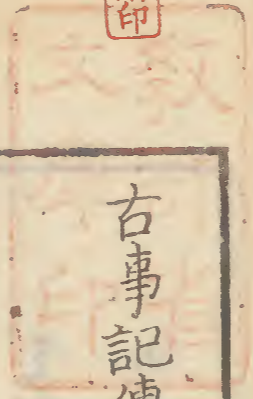
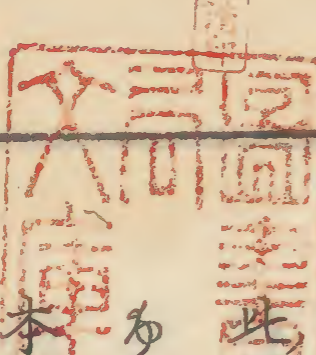
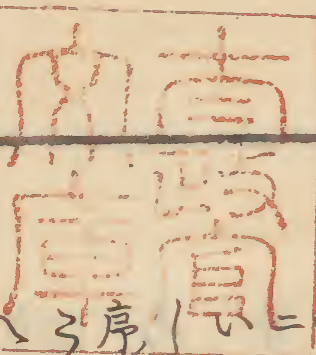
これぞこまははいり讀ても何れべし又昔の

序の訓もあつて考みこいは中昔の奥書といふ

く序をバははり又ち何れ云物も是なり唯

○古事記傳二

〇一



ひらきし此序ハ本文とはいふべく異ありしは。此は漢籍  
の趣を以て其文章をいみしむるに似たりて書す。いり  
然文をうごり當代を賛稱奉るなり。漢の初り  
べその例あるに依りてあり。さて然漢文をうごり  
引きしハ其意旨もあつたり。漢の初り。或は混元既疑  
あるは乾坤初分。あるは陰陽斯開。あるは齊五行之序  
あるは。如斯きことあり。如此きことあり。或は混元既疑  
とは文章みごとくあり。故あり。抑此序にかゝる語  
あるは。其意旨もあつたり。抑此序にかゝる語  
あるは。其意旨もあつたり。抑此序にかゝる語

本文のさまや甚と異なるをいふ。序ハ安万侶の作家  
あるは。其意旨もあつたり。抑此序にかゝる語  
あるは。其意旨もあつたり。抑此序にかゝる語  
あるは。其意旨もあつたり。抑此序にかゝる語  
あるは。其意旨もあつたり。抑此序にかゝる語  
あるは。其意旨もあつたり。抑此序にかゝる語  
あるは。其意旨もあつたり。抑此序にかゝる語  
あるは。其意旨もあつたり。抑此序にかゝる語  
あるは。其意旨もあつたり。抑此序にかゝる語  
あるは。其意旨もあつたり。抑此序にかゝる語

なりければなり。かくて未小至アテ。記乃起アを述ベ書  
ご海をろやろり那どを依處ハ。必よく意得あく依る  
仰少くとも那れ安委曲よ云ベ。

臣安萬侶言夫混元既疑氣象未效無名無為誰知其形。

此は天地乃いまぶ割きざり前の状を漢籍ふ云ふ  
趣も云ふあり混元を混沌ともいひて元氣未分也  
之註せり既疑とは分むもやほるきざりし何るあり氣  
象は天地を始先凡そ氣の象とをいなり。

然乾坤初分參神作造化之首陰陽斯開二靈為群品之祖。

參神ハ天之御中主高御產巢日神產巢日の三柱神を

申以即本文の始又出造化を漢籍ふ天地陰陽の運行  
ふりりて萬物孔成出ふをいなり。二靈は伊邪那岐伊  
邪那美二柱神を申以群品を萬の物あり。此處乃文二  
句對ふかあり。次くもみふ對句なり。さて此序孔  
此何より孔文を見て陰陽乾坤なぞ孔説を古傳ゆも  
其意何りなればこそ撰者もあく取用ひくを起る事  
をひくふより廢むるやいかゞを思ふ人あるべなれ  
や。然らばもし古傳ふ其意何くもは序文孔短き間  
ふゆかくあまよ云ふほやちれ安。本文も必言べ  
きことなかり。本文よ至てハ一字もよ依るやぬし。こ

是は本文と相比べし。序にありし孔語のあるは返り  
 と古傳ふさ意なき證也。此物も正實の虚筋  
 との字が先いよく著明し、これを以ても大御國のこ  
 ころばへ乃漢籍にたむさとはく家より異なるほ  
 ちをもちさやるべくは本文はははしくかも撰者孔  
 私をまどんぶ縁やむも知りて、いかにふとしか  
 或人問をくく、同ト安万侶朝臣、後リ書紀を撰ば、免  
 も陰陽のむしきりも、其事ふあつたなりや云ふ、彼紀ふ  
 臣は此説を信用られ、又此序もあれば、ちか朝  
 書紀撰ば、しは舍人親王、其事ハ執總ふる人、  
 加爲あつた、又此朝臣の意ハ、安万侶朝臣乃意は論ふべき  
 小あはる、又此朝臣の意ハ、綴や、古傳ふたきそは  
 か、はるべきなり、何れも、古傳ふたきそは

こと物なり。

所以出入幽顯、日月彰於洗目、浮沈海水、神祇於滌身。

こと、ふ所以、い、次、小故、とし、寔知、い、是、以、  
 こと、即、とい、る、ふ、ふ、さ、し、も、意、あ、ふ、何、れ、也、  
 輕く、看、は、い、伝、し、さ、伊、邪、那、岐、大、神、の、夜、見、國、小、幸、  
 行、し、と、幽、小、入、云、顯、國、に、回、坐、ふ、を、顯、小、出、と、云、ふ、を、  
 已、日、月、云、こ、は、阿、波、岐、原、小、御、禊、賜、へ、依、時、の、事、なり、  
 下二句も同時の事ぞ。

故太素杳冥、因本教而識、孕土產嶋之時、元始綿邈、賴先聖而  
 察生神立人之世。

太素も元始と世のはじめを云なり。杳冥ハ世の始乃  
以て遠とておちくくさふらぬをいふ。冥字舊  
印本もは皆作ミ。それもあかど同意あり。本教  
は人小物を語ミ。聞以を教りていふ。同トとて。神代  
乃事どもを語傳へる。説をいふなり。綿邈はとちく  
ゆるりゆるりなり。先聖ハ神代の事を言傳へ記し傳  
へき。古孔かこさ人あちをいふ。立人とは天照大  
御神を始て。各事依一賜ひをいふなり。大御神をい  
ひは。いりぐふも聞ゆれども。生神と云ふ。又思ふに。識とい  
ひ察といふを。伊邪那岐命伊邪那美命の御事といふ

も見佐。其時ハ本教を天神の命詔あり。先聖も天神  
を申はちり。

宴知懸鏡吐珠而百王相續喫劍切蛇以万神蕃息歟。

懸鏡とは天照大御神の天石屋よこちり。時よ真

賢木の枝小八咫鏡を取掛しを云るべし。但し百王

へ係て見せ給皇御孫命乃天降坐むせし時小御魂

を授賜ひを云ふかちも聞ゆせむ。吐珠乃上

か。あれはい吐珠と喫劍とは大御神を須佐之男命

誓坐し時の事あり。万神蕃息とは須佐之男命に御子

孫神とちり。孔をろぐり坐依るやあり。  
議安河而平天下論小濱而清國土。

上、句ハ、皇御孫、命ノ天降坐むとひる時ハ、八百万神を  
集へて議ふまひりて、下、句ハ、建御雷神ノ伊那佐ノ  
小濱小降りて、大國主神を諭ひ令伏て、天下を和静  
免賜ひし事あり。

是以番仁岐命初降于高千嶺神倭天皇經歷于秋津嶋。

仁字ハ、迹牟利音を迹、この二音に用ひるなり。然例  
多し。秋津嶋ハ、大倭國をいふ。

化熊出爪天、劍獲於高倉生尾遮徑、大鳥導於吉野。

この四乃事を四句云て、二句が、對おせり。皆白書  
原御世の事ありて、其御段小見えたり。爪ハ字を写し

誤るるあり。山ハ穴ハなるべし。延佳ハ水ハ派ハの誤

ろハ、生尾ハ、生尾人ヤあり。大鳥ハ、八咫鳥なり。

列儻攘賊聞歌伏仇。

此も同御段小見ゆ。但し儻のろハ見えぬ。書紀あり  
道、臣命乃起而歌之、そのみあり。されば後小久米儻ヤ  
いふ。此時の態と聞ゆれば、儻も志たむ。

即覺夢而敬神祇、所以稱賢后、望烟而撫黎元、於今傳聖帝。

上ハ水垣宮、御世ノ事。下ハ高津宮、御世ノ事。みふ  
其御段、小出あり。后ハ君あり。神功皇后ハ御事なり。其  
ろハ、見。黎元ハ、民をいふ。後、崇神仁徳ト御謚を奉ら  
る。乃文ノ意あり。



定境開邦制于近淡海正姓撰氏勒于遠飛鳥

上ハ志賀宮御代の事よ。近淡海其都の國名なり。  
下ハ遠飛鳥宮御世の事なり。制勒とは。其官小坐  
まゝて天下の政所聞者一をいふ。是まは古の  
御代に聞え高き事どもをこれかき出でて。文  
飭小書るあり。

雖步驟各異文質不同莫不誓古以繩風猷於既類照今以補  
典教於欲絶

此乃上件乃事どもを取總てるなり。歩ハ徐  
尔歩むるなり。驟ハ疾走するなり。政も世に孔る爾

随ひて寛まや急るとのりあり。あをいふあり。  
皇。三  
歩五帝驟。風猷を風教道德あり。さそかくいふなり。  
必しも上小舉ふる事ども。悉くは當らぬ。只漢人  
の常小いふなる趣を。文乃かざり。ふ書るのみあり。こ  
て如此言て下。文の本を起るあり。

暨飛鳥清原大宮御大八洲天皇御世

此乃下。此天皇後諡天武の御事を申と依文あり。洲字州  
也作ふるあり。今ハ一本小あり。

潜龍體元洊雷應期

こはいま。儲君あて坐ま。ほげを申せる。賛詞を

潜龍も洊雷も易の言もて太子乃ろや小申せり。洊雷  
は易に洊雷震と有りて震為長子也い  
へふより出ふり洊字洊作ふハ誤也  
聞夢歌而想纂業投夜水而知承基

此々天津日嗣ちろくは伝さるや純有るや  
已夢歌の事ハ書紀小見えぬ漏れぬるぬるべし投夜水  
とは東國尔下已坐多とて夜半尔伊賀の隱乃横河  
小至坐一ろやなるべし此時小廣さ十餘丈乃黑雲か  
こりて天又わたりぬれ然異一やおもちて御自白  
へ賜も小天下二小分せり故もろハみを得ぬあも伝  
る祥あり一ろや書紀小見えぬる  
聞字開作ふハ誤  
り今一本小依

然天時未臻蟬蛻於南山人事共洽虎歩於東國

上は京師をのぐれ出て吉野山小入坐一ろや下ハ道  
よも人多小後ひ附奉て御威さかり尔ちりゆして美  
濃國小幸行一ゆやなり皆書紀小見ぬ洽字延佳本尔  
は給や作るそれも一ろか交

皇興忽駕凌渡山川六師雷震三軍電逝

凌も歴也と註せり。汎海凌山なや云已延佳  
本小凌や作ふは誤ちり六師は六  
軍あり下二句ハ皇軍のさかりあるらるをいるり漢  
天子は六軍大國を三軍をいふれぬも此はる  
數字を對小せる乃みあり六と三や小意ちなりし  
杖矛舉威猛士烟起絳旗耀兵凶徒瓦解

上三句ハ御方ハ軍のさしりたるさ海。下一句ハ淡海  
の軍ハ敗れしさまなり。

未移<sup>ニ</sup>決<sup>レ</sup>辰<sup>ニ</sup>氣<sup>ヲ</sup>冷<sup>シ</sup>自<sup>ラ</sup>清<sup>ム</sup>

是ハ仇速<sup>ス</sup>ハ亡<sup>ス</sup>び<sup>テ</sup>天<sup>ノ</sup>下<sup>ヲ</sup>治<sup>メ</sup>り<sup>テ</sup>を云ふなり。決辰は  
子より亥まで一周乃日數<sup>十二</sup>日。して其を移さるやハ  
ほどもちくはみやうなる意あり。冷ハ妖氣なり。此惡  
き氣去<sup>リ</sup>て清<sup>ラ</sup>かり<sup>テ</sup>邪<sup>ヲ</sup>多<sup>ク</sup>り<sup>テ</sup>な<sup>リ</sup>。さて此冷字諸本並  
ふ誤<sup>リ</sup>て弥<sup>ト</sup>と作<sup>リ</sup>。今ハ延<sup>任</sup>自<sup>ラ</sup>考<sup>ム</sup>ふよりて改<sup>メ</sup>る。

乃<sup>チ</sup>放<sup>チ</sup>牛<sup>ヲ</sup>息<sup>マ</sup>馬<sup>ヲ</sup>愷<sup>々</sup>悌<sup>々</sup>歸<sup>リ</sup>於<sup>テ</sup>華<sup>夏</sup>卷<sup>テ</sup>旌<sup>ヲ</sup>戢<sup>テ</sup>戈<sup>ヲ</sup>儼<sup>々</sup>詠<sup>ヒ</sup>停<sup>ム</sup>於<sup>テ</sup>都<sup>邑</sup>

放牛息馬とははか<sup>レ</sup>國<sup>ノ</sup>周<sup>武</sup>王<sup>ガ</sup>紂<sup>ニ</sup>勝<sup>テ</sup>後<sup>ニ</sup>馬<sup>ヲ</sup>を

華山の南<sup>ニ</sup>歸<sup>ル</sup>。牛<sup>ヲ</sup>を桃林<sup>ノ</sup>野<sup>ニ</sup>放<sup>テ</sup>。再<sup>ビ</sup>服<sup>ム</sup>はぬ<sup>コト</sup>や

を志<sup>ス</sup>て<sup>シ</sup>故<sup>コト</sup>事<sup>ナリ</sup>。愷悌<sup>ハ</sup>軍<sup>ノ</sup>勝<sup>リ</sup>し<sup>時</sup>乃<sup>チ</sup>樂<sup>ム</sup>なり。書  
紀<sup>ノ</sup>イ<sup>ク</sup>サ<sup>ト</sup>ケ<sup>テ</sup>訓<sup>ス</sup>。愷<sup>ハ</sup>悌<sup>ノ</sup>字<sup>ニ</sup>心<sup>ヲ</sup>得<sup>ル</sup>。其<sup>ノ</sup>故<sup>ハ</sup>  
之<sup>レ</sup>樂<sup>ム</sup>なり。悌<sup>ハ</sup>字<sup>ニ</sup>多<sup>ク</sup>ハ其<sup>ノ</sup>義<sup>ハ</sup>。悌<sup>ハ</sup>字<sup>ニ</sup>心<sup>ヲ</sup>得<sup>ル</sup>。其<sup>ノ</sup>故<sup>ハ</sup>  
い<sup>ハ</sup>ふ<sup>コト</sup>や<sup>ハ</sup>多<sup>ク</sup>ハ其<sup>ノ</sup>義<sup>ハ</sup>。悌<sup>ハ</sup>字<sup>ニ</sup>心<sup>ヲ</sup>得<sup>ル</sup>。其<sup>ノ</sup>故<sup>ハ</sup>  
然<sup>ル</sup>る<sup>コト</sup>今<sup>ハ</sup>愷<sup>々</sup>悌<sup>々</sup>を愷悌<sup>ト</sup>い<sup>ハ</sup>へ<sup>ル</sup>。愷<sup>ハ</sup>悌<sup>ノ</sup>字<sup>ニ</sup>心<sup>ヲ</sup>得<sup>ル</sup>。其<sup>ノ</sup>故<sup>ハ</sup>  
愷悌<sup>ハ</sup>字<sup>ニ</sup>心<sup>ヲ</sup>得<sup>ル</sup>。其<sup>ノ</sup>故<sup>ハ</sup>  
誤<sup>リ</sup>る<sup>コト</sup>や<sup>ハ</sup>あり<sup>キ</sup>。書<sup>ノ</sup>紀<sup>ノ</sup>イ<sup>ク</sup>サ<sup>ト</sup>ケ<sup>テ</sup>訓<sup>ス</sup>。愷<sup>ハ</sup>悌<sup>ノ</sup>字<sup>ニ</sup>心<sup>ヲ</sup>得<sup>ル</sup>。其<sup>ノ</sup>故<sup>ハ</sup>  
然<sup>ル</sup>る<sup>コト</sup>漢<sup>ノ</sup>籍<sup>ニ</sup>も<sup>ハ</sup>例<sup>ナリ</sup>。や<sup>ハ</sup>不<sup>レ</sup>尋<sup>ム</sup>べ<sup>シ</sup>。

歲次<sup>ニ</sup>大<sup>梁</sup>月<sup>ノ</sup>踵<sup>ヲ</sup>夾<sup>テ</sup>鍾<sup>ヲ</sup>清<sup>原</sup>大<sup>官</sup>昇<sup>即</sup>天<sup>位</sup>

初<sup>メ</sup>句<sup>ハ</sup>酉<sup>年</sup>と<sup>い</sup>ふ。大<sup>梁</sup>ハ十二<sup>次</sup>乃<sup>チ</sup>内<sup>ノ</sup>昴<sup>宿</sup>の次<sup>ハ</sup>  
て昴<sup>ハ</sup>二十八<sup>宿</sup>乃<sup>チ</sup>中<sup>ニ</sup>西<sup>方</sup>の星<sup>ニ</sup>西<sup>ハ</sup>酉<sup>方</sup>なり。是<sup>ハ</sup>  
也。次<sup>ハ</sup>句<sup>ハ</sup>二<sup>月</sup>と<sup>い</sup>ふ。夾<sup>テ</sup>鍾<sup>ハ</sup>十二<sup>律</sup>の中<sup>ニ</sup>乃<sup>チ</sup>二<sup>月</sup>の律

るればなり。踵ハ鍾不同ト。通ハ書不例あり。とて書紀を考ふる。此天皇癸酉年二月癸未二十七日御位即すませり。

道軼軒后徳跨周王

軒后ハ漢國の黄帝といふ王。周王ハ文王武王といふ。握乾符而摠六合。得天統而包八荒。

乾符ハ天の吉端あり。六合ハ上下四方あり。天統ハ天の授らる。帝統ハ皇の授らる。八荒ハ八方に遠る國とあり。

乘二氣之正齊五行之序

二氣ハ陰陽をいふ。君の政の後一きれ。陰陽五行乃

はとび正しくして。四時の氣候みづれ。漢人乃常孔談あり。

設神理以獎俗敷英風以弘國

神理ハ神妙の道理あり。獎俗とは勸免導きて風俗をよくなすをいふ。英風ハ英聖乃風教なり。

重加智海浩瀚潭探上古心鏡煒煌明覩先代

智海とは御智孔廣と大なるを海とて心鏡とは御心乃明らまきを鏡ふるをいふ。浩瀚ハ廣大貌。煒煌ハ光明貌なり。とて此は。此天皇孔九の御を申て。次乃事を申さむ料あり。

於是天皇詔之。朕聞諸家之所賣帝紀及本辭。既違正實。多加  
虛偽。賣大將軍。...

詔之の之字。延佳本亦云。作。これよりし。賣。齋  
乃俗字なり。云。延佳本亦。齋。作。帝紀。下文  
爾帝皇。日繼を。御。代。天津日嗣を  
記。奉。書。書紀。天武御卷の。川嶋皇子等。修  
撰。乃。處。帝紀とあり。推古御卷の。皇太子乃。修撰の  
處。又皇極御卷乃。蘇我蝦蟇。燒。處。は。天皇  
記。國史。い。は。か。く。帝紀。天皇記。い  
る。古の。本辭。下文。先代。舊辭。と

ゆ。同。蝦蟇。燒。處。國記。い。ひ。聖德太子  
乃。修撰の。處。國記。臣連伴。造國。造百八十部。并。公。民等  
本記。云。亦。是。川嶋皇子等。修  
撰。乃。上。古。諸。事。は。正。く。然  
ゆ。今。は。舊。事。い。は。本辭。舊辭。と。云。亦。辭。字。に  
眼。を。か。け。て。天。皇。の。此。事。あ。り。し。大。御。意。は  
も。古。語。在。る。と。云。は。此。記。乃。本。の。起。を  
未。行。其。事。矣。云。は。此。記。乃。本。の。起。を  
演。る。は。慙。尔。見。佐。上。件。乃。乃。み。小。書  
つ。る。文。と。は。異。ち。る。もの。ぞ。

當今之時不改其失未經幾年其旨欲滅

其失とはかの多加虚偽とある是なり其旨は正實の旨ちる當時虚偽多くありていづもち不正實も全と滅びあるふ何れぞ天皇の海乃ぞや廣き御智鏡のあや明もき御心もて辨へるもくはゆよく分る故ふ今是時小改免正一かくまはいよく虚偽おちりりゆきて今幾ほをもなく正實の旨は滅びせむ物ぞやがこれぞ愁坐あり然る後同も正實の處をばちかざりありてふも漢をさふも虚偽の文をのみ重くはるはいうりぞや斯乃邦家之經緯王化之鴻基焉

經緯とは國を知りたるふちてえあむ物なること

故惟撰錄帝紀討覈舊辭削偽定實欲流後葉

是もぞ詔命あり討覈も深く實と尋ねて考へ究むる

るゆなり此一句殊小古學の要とあることぞおちるを看過しそ後葉も後世なり欲字は撰錄乃上る在るも文意なり

時有舍人姓裨田名阿禮年是廿八為人聰明度目誦口拂耳勤心

裨田姓姓氏錄不見也延佳本弘仁私記序を引ふゆり天鈿女命之後也此云云書紀天武上御卷小如以此云地名見えり大倭國の國

えり。今漆上郡小押田村彼地より出づ。姓あり。一。度目誦口とは一。あひ見ゆる書をバヤグて空ふるかべく。よく諷誦をいふ。拂耳勸心も。一。うひ聞ゆる。おをば。忘ゆ。く。や。ち。を。い。ふ。廿。字。延。佳。本。よ。ち。二。十。同。い。ら。や。る。れ。ど。も。此。何。う。り。多。く。ハ。一。句。四。字。ち。れ。バ。此。句。も。然。ふ。べ。一。故。今。は。舊。本。小。う。れ。り。  
即勅語阿禮令誦習帝皇日繼及先代舊辭

勅語を天皇に大御口おろし詔ひ属はる。有司傳へ宜し。又。又。書。ふ。か。き。る。お。や。を。も。ふ。ふ。勅。か。く。て。此。は。か。は。い。る。や。も。そ。は。勅。語。と。は。い。は。は。ん。か。殊。ち。る。意。も。有。べ。き。其。ち。下。か。い。ふ。る。し。令。誦。習。也。は。舊。記。乃。本。を。は。る。れ。て。そ。う。に。誦。う。か。べ。く。其。語。を。と。

はく口おれ志むるをいふなり。抑直爾書みは撰録し。免。て。先。か。く。入。乃。口。お。移。し。て。お。く。誦。習。は。一。免。賜。も。は。語。を。重。み。一。あ。り。あ。が。故。り。此。事。既。尔。一。乃。卷。ふ。云。ふ。が。如。し。書。紀。纂。疏。尔。弘。仁。私。記。序。尔。天。皇。勅。阿。禮。使。習。帝。王。本。紀。及。先。代。舊。事。紀。也。何。る。は。此。乃。文。を。見。誤。る。て。舊。辭。を。舊。事。紀。也。一。も。云。ふ。あり。ゆ。免。今。世。よ。何。る。か。思。ひ。お。か。へ。そ。彼。題。號。を。此。私。記。乃。文。を。取。て。そ。お。ま。り。く。事。然。運。移。世。異。未。行。其。事。矣。

天皇崩坐て御世かほりふられば撰録乃事果一行ハ。お。く。し。て。討。覈。あ。り。一。帝。紀。舊。辭。ハ。い。く。お。く。る。阿。禮。が。

口ふ乃るなりあり。

伏惟皇帝陛下得一光宅通三亭育。

皇帝ハ撰者の當代那良官御宇天津御代豊國成姫天

皇後御諡を申せり得一老子は老子尔天得一以清地得

一以寧王侯得一以為天下貞と云ふよりいふを

光宅とは天下を凡て家と爲る意もオホキニヲ

ル光宅也也といふ訓也古文尚書堯典

云ふより出通三とは天地人乃三才尔通なり亭育

は本ハ亭毒也云ふを通ほして如此と云ふは

を化育するなり是も始は老子尔亭之毒之也

註尔毒今作育

此の有り。亭字を舊印本に亭作ふは誤なり。さして此より又例乃漢語

を多く引出て賛申せり。

御紫宸而德被馬蹄之所極坐玄扈而化照船頭之所逮

紫宸も玄扈も天皇此御處をいふ玄扈ハ黄帝が洛水

乃上ちる玄扈といふ石室小坐あり一時小鳳凰圖を

含来て授き給ふ云々あり舊印本に宸を震ふ船を

松尔誤

日浮重暉雲散非烟

浮々出ふなり重暉とは光暉の明らきをいふ雲云

云とは雲此如くありて雲に何れ煙乃如く



烟尔何々々。虚空小見ゆるをいふ。いはゆる慶雲なり。  
連柯并穂之瑞史不絶書。列烽重譯之貢。府無空月。

連柯キ并穂ホ之瑞史ス不絶書ス。列烽ト重譯ト之貢ト。府無シ空月シ。  
穂乃一尔あひゆる稲よそいほゆる嘉禾あり。下二句  
外タ國ノよりあひゆる貢使乃月々に絶間タありを云て。列  
烽ハ常ニに烽トを列シね構へおきて防ヲをゆる國々重譯ハ  
譯ヲを重ね交へば言語乃通えぬ遠き國々あり。さて然  
依國々も今皆朝貢はとなり。府々その貢物を納所  
府倉あり。列烽と云ふるや其貢使乃来ぬ時尔あひ  
るいひざるあり。あは文選ニあり。顔延年曲水詩序  
尔。顏莖素堯并柯共穂之瑞史不絶書。棧山航海踰沙鞅

可謂名高文命德冠天乙矣。  
漢之貢。府無空月。列烽。下城。通驛。萬里。穹居之君。内首。稟  
朔并服之箇。迴面受使。史也。いなる文を次りしかく書  
ぶ。ちれば此文よそ心得べきなり。凡そ  
文選中の文を取らる處をいひて多かり。

文命ハ夏禹天乙は殷湯あり。並我國の古孔名高王  
をもあり。此よそハ當代トをほゑ奉れる文よそ例の次  
乃事を申さむ料あり。

於焉惜舊辭之誤。忤正先紀之謬。錯  
これらり。ちよそく正しく此記を撰録し先賜ひし事談  
演する中尔。此一節ハまは其大御志をいなる。謬字繆  
也。作本も何り。同ト御也。あり。

以和銅四年九月十八日詔臣安萬侶撰錄裨田阿禮所誦之  
勅語舊辭以獻上者

くく此文乃さる然思ふに阿禮此時ち存<sup>イケ</sup>在<sup>ケ</sup>マヤ見  
えり。此人<sup>女</sup>上<sup>上</sup>文<sup>文</sup>八<sup>八</sup>歳<sup>歳</sup>と何<sup>何</sup>の<sup>の</sup>年<sup>年</sup>ち<sup>ち</sup>り<sup>り</sup>を<sup>を</sup>む<sup>む</sup>ち<sup>ち</sup>り<sup>り</sup>は<sup>は</sup>か<sup>か</sup>の<sup>の</sup>清<sup>清</sup>御<sup>御</sup>原<sup>原</sup>御<sup>御</sup>  
年<sup>年</sup>ふ<sup>ふ</sup>は<sup>は</sup>齡<sup>齡</sup>い<sup>い</sup>ら<sup>ら</sup>は<sup>は</sup>り<sup>り</sup>ゆ<sup>ゆ</sup>ふ<sup>ふ</sup>有<sup>有</sup>ら<sup>ら</sup>む<sup>む</sup>さ<sup>さ</sup>ら<sup>ら</sup>り<sup>り</sup>ハ<sup>ハ</sup>知<sup>知</sup>が<sup>が</sup>  
多<sup>多</sup>き<sup>き</sup>れ<sup>れ</sup>ど<sup>ど</sup>嬉<sup>嬉</sup>々<sup>々</sup>と<sup>と</sup>彼<sup>彼</sup>を<sup>を</sup>元<sup>元</sup>年<sup>年</sup>や<sup>や</sup>し<sup>し</sup>て<sup>て</sup>數<sup>數</sup>ふ<sup>ふ</sup>れば<sup>れば</sup>六<sup>六</sup>十<sup>十</sup>八<sup>八</sup>歳<sup>歳</sup>ふ<sup>ふ</sup>  
何<sup>何</sup>と<sup>と</sup>思<sup>思</sup>ひ<sup>ひ</sup>され<sup>れ</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>その<sup>その</sup>か<sup>か</sup>み<sup>み</sup>所<sup>所</sup>思<sup>思</sup>眷<sup>眷</sup>し<sup>し</sup>慈<sup>慈</sup>し<sup>し</sup>く<sup>く</sup>や<sup>や</sup>い<sup>い</sup>ま<sup>ま</sup>ご  
と<sup>と</sup>行<sup>行</sup>は<sup>は</sup>し<sup>し</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>か<sup>か</sup>ぎ<sup>ぎ</sup>ふ<sup>ふ</sup>天皇<sup>天皇</sup>崩<sup>崩</sup>ま<sup>ま</sup>し<sup>し</sup>を<sup>を</sup>思<sup>思</sup>へ<sup>へ</sup>ま<sup>ま</sup>御<sup>御</sup>世<sup>世</sup>乃<sup>乃</sup>  
未<sup>未</sup>初<sup>初</sup>か<sup>か</sup>の<sup>の</sup>事<sup>事</sup>ふ<sup>ふ</sup>る<sup>る</sup>や<sup>や</sup>あり<sup>り</sup>け<sup>け</sup>た<sup>た</sup>も<sup>も</sup>し<sup>し</sup>か<sup>か</sup>く<sup>く</sup>て<sup>て</sup>彼<sup>彼</sup>清<sup>清</sup>御<sup>御</sup>原<sup>原</sup>  
崩<sup>崩</sup>乃<sup>乃</sup>年<sup>年</sup>れ<sup>れ</sup>く<sup>く</sup>せ<sup>せ</sup>ら<sup>ら</sup>五<sup>五</sup>十<sup>十</sup>三<sup>三</sup>歳<sup>歳</sup>なり<sup>り</sup>か<sup>か</sup>く<sup>く</sup>て<sup>て</sup>彼<sup>彼</sup>清<sup>清</sup>御<sup>御</sup>原<sup>原</sup>  
朝<sup>朝</sup>御<sup>御</sup>世<sup>世</sup>ふ<sup>ふ</sup>誦<sup>誦</sup>習<sup>習</sup>ひ<sup>ひ</sup>あ<sup>あ</sup>さ<sup>さ</sup>む<sup>む</sup>る<sup>る</sup>帝<sup>帝</sup>紀<sup>紀</sup>舊<sup>舊</sup>辭<sup>辭</sup>ハ<sup>ハ</sup>此<sup>此</sup>人<sup>人</sup>乃<sup>乃</sup>口<sup>口</sup>ふ<sup>ふ</sup>  
これ<sup>これ</sup>を<sup>を</sup>今<sup>今</sup>安<sup>安</sup>万<sup>万</sup>侶<sup>侶</sup>朝<sup>朝</sup>臣<sup>臣</sup>ふ<sup>ふ</sup>詔<sup>詔</sup>命<sup>命</sup>仰<sup>仰</sup>せ<sup>せ</sup>て<sup>て</sup>撰<sup>撰</sup>錄<sup>錄</sup>し<sup>し</sup>免<sup>免</sup>賜<sup>賜</sup>ふ<sup>ふ</sup>  
なり<sup>なり</sup>と<sup>と</sup>そ<sup>そ</sup>此<sup>此</sup>ハ<sup>ハ</sup>舊<sup>舊</sup>辭<sup>辭</sup>と<sup>と</sup>のみ<sup>のみ</sup>云<sup>云</sup>て<sup>て</sup>帝<sup>帝</sup>紀<sup>紀</sup>を<sup>を</sup>い<sup>い</sup>は<sup>は</sup>ざる<sup>ざる</sup>は<sup>は</sup>

舊辭ふこ免<sup>免</sup>く<sup>く</sup>文<sup>文</sup>を<sup>を</sup>省<sup>省</sup>く<sup>く</sup>る<sup>る</sup>あり<sup>り</sup>又<sup>又</sup>く<sup>く</sup>は<sup>は</sup>口<sup>口</sup>ふ<sup>ふ</sup>誦<sup>誦</sup>習<sup>習</sup>へ<sup>へ</sup>  
紀<sup>紀</sup>も<sup>も</sup>甚<sup>甚</sup>語<sup>語</sup>乃<sup>乃</sup>内<sup>内</sup>ふ<sup>ふ</sup>あ<sup>あ</sup>れ<sup>れ</sup>バ<sup>バ</sup>別<sup>別</sup>ふ<sup>ふ</sup>は<sup>は</sup>帝<sup>帝</sup>紀<sup>紀</sup>と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>ず<sup>ず</sup>て<sup>て</sup>舊<sup>舊</sup>辭<sup>辭</sup>  
云<sup>云</sup>ま<sup>ま</sup>じ<sup>じ</sup>さ<sup>さ</sup>く<sup>く</sup>や<sup>や</sup>も<sup>も</sup>と<sup>と</sup>なり<sup>り</sup>乃<sup>乃</sup>か<sup>か</sup>ふ<sup>ふ</sup>り<sup>り</sup>や<sup>や</sup>謂<sup>謂</sup>ふ<sup>ふ</sup>は<sup>は</sup>何<sup>何</sup>と<sup>と</sup>又<sup>又</sup>此<sup>此</sup>ハ<sup>ハ</sup>し<sup>し</sup>も<sup>も</sup>か<sup>か</sup>く<sup>く</sup>勅<sup>勅</sup>語<sup>語</sup>の<sup>の</sup>や<sup>や</sup>  
何<sup>何</sup>と<sup>と</sup>を<sup>を</sup>以<sup>以</sup>思<sup>思</sup>へ<sup>へ</sup>ば<sup>ば</sup>や<sup>や</sup>此<sup>此</sup>勅<sup>勅</sup>語<sup>語</sup>を<sup>を</sup>唯<sup>唯</sup>ふ<sup>ふ</sup>此<sup>此</sup>事<sup>事</sup>を<sup>を</sup>詔<sup>詔</sup>ひ<sup>ひ</sup>属<sup>属</sup>し<sup>し</sup>  
のみ<sup>のみ</sup>ハ<sup>ハ</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>て<sup>て</sup>彼<sup>彼</sup>天<sup>天</sup>皇<sup>皇</sup>武<sup>武</sup>の<sup>の</sup>大<sup>大</sup>御<sup>御</sup>口<sup>口</sup>抄<sup>抄</sup>ハ<sup>ハ</sup>此<sup>此</sup>舊<sup>舊</sup>辭<sup>辭</sup>  
を<sup>を</sup>誦<sup>誦</sup>坐<sup>坐</sup>して<sup>して</sup>其<sup>其</sup>を<sup>を</sup>阿<sup>阿</sup>禮<sup>禮</sup>ふ<sup>ふ</sup>聽<sup>聽</sup>取<sup>取</sup>し<sup>し</sup>て<sup>て</sup>誦<sup>誦</sup>坐<sup>坐</sup>大<sup>大</sup>御<sup>御</sup>言<sup>言</sup>此<sup>此</sup>  
ま<sup>ま</sup>く<sup>く</sup>誦<sup>誦</sup>う<sup>う</sup>抄<sup>抄</sup>し<sup>し</sup>習<sup>習</sup>ハ<sup>ハ</sup>免<sup>免</sup>賜<sup>賜</sup>つ<sup>つ</sup>ふ<sup>ふ</sup>も<sup>も</sup>あ<sup>あ</sup>る<sup>る</sup>べ<sup>べ</sup>し<sup>し</sup>若<sup>若</sup>然<sup>然</sup>  
ば<sup>ば</sup>此<sup>此</sup>處<sup>處</sup>ふ<sup>ふ</sup>は<sup>は</sup>殊<sup>殊</sup>ふ<sup>ふ</sup>勅<sup>勅</sup>語<sup>語</sup>乃<sup>乃</sup>や<sup>や</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>ず<sup>ず</sup>に<sup>に</sup>何<sup>何</sup>と<sup>と</sup>わ<sup>わ</sup>ら<sup>ら</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>は<sup>は</sup>  
ち<sup>ち</sup>り<sup>り</sup>と<sup>と</sup>れ<sup>れ</sup>ど<sup>ど</sup>餘<sup>餘</sup>乃<sup>乃</sup>古<sup>古</sup>書<sup>書</sup>と<sup>と</sup>も<sup>も</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>ず<sup>ず</sup>勅<sup>勅</sup>語<sup>語</sup>と<sup>と</sup>は<sup>は</sup>大<sup>大</sup>御<sup>御</sup>口<sup>口</sup>  
抄<sup>抄</sup>ハ<sup>ハ</sup>詔<sup>詔</sup>ひ<sup>ひ</sup>抄<sup>抄</sup>く<sup>く</sup>係<sup>係</sup>を<sup>を</sup>云<sup>云</sup>ふ<sup>ふ</sup>例<sup>例</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>ば<sup>ば</sup>もし<sup>もし</sup>然<sup>然</sup>ふ<sup>ふ</sup>ま<sup>ま</sup>は<sup>は</sup>  
上<sup>上</sup>り<sup>り</sup>は<sup>は</sup>唯<sup>唯</sup>其<sup>其</sup>意<sup>意</sup>ふ<sup>ふ</sup>注<sup>注</sup>し<sup>し</sup>た<sup>た</sup>る<sup>る</sup>なり<sup>り</sup>此<sup>此</sup>記<sup>記</sup>ハ<sup>ハ</sup>本<sup>本</sup>彼<sup>彼</sup>清<sup>清</sup>御<sup>御</sup>原<sup>原</sup>官<sup>官</sup>御<sup>御</sup>宇<sup>宇</sup>天<sup>天</sup>皇<sup>皇</sup>の<sup>の</sup>可<sup>可</sup>畏<sup>畏</sup>と<sup>と</sup>も<sup>も</sup>大<sup>大</sup>御<sup>御</sup>親<sup>親</sup>撰<sup>撰</sup>

びある心定先賜ひ誦しよを唱へ賜ふる古語ありあ  
き世ふるむらひもゆくいゆと貴き御典ありを  
然る御世ありて後彼御志紹坐御舉れなかり  
ましくあさばのり貴き古語も阿禮が命やもろとも  
ふ亡はるるまゝに歡きかむおむかしにいと天神國  
神の靈幸ひ坐て和銅の大御代ふ此御撰録ありて今  
孔現ふ此御典乃傳はり來りたるゆゆ物學びせむ人  
頂よ捧持て天神國神又二御代の天皇尊天武元明又釋田  
老翁太朝臣孔恩頼を莫忘そゆ記の本を起し賜ひ  
ありし其撰録し元明天皇の和銅元年申年  
をかくるかかきなく宣長此傳を藝し初む今の太

御代乃明和元年し又申年ふあり  
ゆるるやをちむ竊ふ部しみ思ふ

謹隨詔首子細採撫

此より安万侶朝臣撰録のさまを演所れしり

然上古之時言意並朴敷文構句於字即難

上古之時云々此文を以見れば阿禮が誦ふ語乃い  
古かりをむらや知所れて貴敷文の構句とは二ふ  
はあはれ共ふるむ文よかきうゆを云るり於字即  
難とは文ふ書取がにをいふ文を漢文なれ安あり  
後世乃如く假字文ありむらいはいある古言も書取  
がにたるやなまれども當時をいふと假字のみを以  
て事を記し例上代乃ゆやるれば意も言も共ふい  
を何とざりる

已因訓述者詞不逮心

古くして當時の心は異なるが多加げまれば漢文  
あはかき取らざるかきむる宜なり。上古乃心言の  
朴なりや何をもよく思ふべし。奥ありて理なき意も  
ふはらひさうおありなり。然るおかの漢文を意  
おもひて虚をみまじりのみ多くて。此の文をよく味ひて撰  
者のいうて上代の意言を違へて誤解せしと勤しむ慎  
おれまはるほををしはるるべし。はる書紀なるもの如  
漢文をいふくかざりてはる上代の意言に疎かると  
さゆをよきやの故べし。此記乃ぞやかざりてはるか  
ある物を況や漢文をよくかざりてはるかざりてはる  
はいうて正實のまくりは書取らるるべし。

已ハ盡の意あり。書紀神代卷ノ鏡既破碎継躰卷ノ全  
布流雪乃出雲風土記ノ既礪之レ因訓述とは字孔訓  
を取用ひて古語を記せるはゆいはいはゆる真字なり。  
詞をその因訓述とて文なり。心は古語の意あり。意字  
かばし心やしも云ふ。上文の近き處を意字ある  
故りさげあるなり。凡て此序文同字を用ふるを嫌  
む。然言ころは世間ある舊記どこの例を見ゆる  
悉く字孔訓を以て記せるは中おいはゆる借字を  
ゆが多くて其れ其字孔義異なるがゆある。語の意ま  
どは得及び至所とあり。又思ふころは此記志し  
ても何む。若然るは述字ハノブレバ心訓をく心  
を撰者乃意あり。さて文乃義を悉く了訓お因て述む

此の如く古語を違ふしと思ふ心乃まゝに之を文乃ゆ  
きやぐに記がさきや云ふあり。如此も所むりや思  
ひよれゆるゆゑ若し上ふいなる意をむりハ記中ふ  
借字をば書まじさるや。借りるに不借字多きれ  
ばあり。然し或も借字を多く用ふハ古乃おしなぐ  
の世乃ありひまを。殊ふ地名や。あまの書ふ  
所ひもむむを。正字の知りれずむ物か。中々に改  
めむや。あらさるや。さあし。何れは。さやぐふは。え  
あまのまじさるや。さあし。  
まられ。あまのまじさるや。さあし。

全以音連者事趣更長

音とは字音を假て書かして。即假字あり。事趣を連ぬ  
る文面をいふあり。然言る。ゆゑ全く假字のみを  
以書るは。字數のこゝたなく多くありて。かの因訓述  
依ふ比まれば。其文更長し。やなる。又かの後ふこゝ  
ろみふ云。然る意

御代乃明和元年し。又申年ふあり。  
ゆゑさやをむむ。竊ふ部し。み思ふ。

謹隨詔旨子細採撫

此より安万侶朝臣撰録のさまを演所れしり。

然上古之時言意並朴敷文構句於字即難

上古之時云々。此文を以見れば。阿禮が誦ふ語乃い  
古かりきむりや。知りて貴し。敷文や構句とは。二ふ  
はあり。凡共ふるや。文よかきう。ゆゑを云あり。於字即  
難とは。文ふ書取が。さやをいふ。文や漢文なれ。安あり。  
後世乃如く假字文あり。むりは。いゝなる古言も。書取  
が。さやをいふ。なむれや。むりは。いゝなる古言も。書取  
て事を記し。例上代乃。ゆゑをいふ。は。意も言も共ふい  
を。何れぞりき。

古くは、當時の文は異なるが多かたむきなれば、漢文  
 ははかき取、ごのかりをむるを宜なり。上古乃ハ言の  
 朴なりや、何るをよく思ふべし。奥ありむり理、多きも  
 不、以、ちハ、さ、う、お、ち、り、り、な、り、然、る、お、か、の、漢、文、を、意、  
 其、旨、の、ゆ、く、異、ち、る、を、し、  
 其、旨、の、ゆ、く、異、ち、る、を、し、  
 者、の、い、う、で、上、代、の、意、言、を、違、へ、ド、誤、解、じ、と、勤、し、み、慎、  
 お、れ、ま、る、ほ、を、お、し、は、う、る、べ、く、は、る、書、紀、ち、ど、の、如、  
 漢、文、を、い、る、く、か、ご、り、と、い、ふ、上、代、の、意、言、に、疎、か、る、べ、  
 さ、修、也、を、も、さ、や、り、故、べ、  
此、記、乃、ご、の、か、ご、り、を、い、ふ、  
 此、記、乃、ご、の、か、ご、り、を、い、ふ、  
 此、記、乃、ご、の、か、ご、り、を、い、ふ、  
 已、因、訓、述、者、詞、不、逮、心、  
此、記、乃、ご、の、か、ご、り、を、い、ふ、  
 此、記、乃、ご、の、か、ご、り、を、い、ふ、  
 此、記、乃、ご、の、か、ご、り、を、い、ふ、

是以今或一句之中、交用音訓、  
よ、ま、は、此、も、連、者、を、ツ、ラ、ヌ、レ、バ、  
 之、訓、で、撰、者、の、思、ひ、度、を、し、る、あり、

こは上文ある如く、悉く訓ふ因て、真字書にを依り、  
 中、小、借、字、多、く、て、語、の、意、さ、も、り、が、さ、く、り、り、と、し、は、  
 全、く、假、字、書、ふ、あ、ら、う、る、を、文、を、も、り、く、長、く、お、り、て、煩、は、  
 一、故、是、以、今、ハ、宜、し、き、り、や、を、は、か、り、て、二、物、を、お、じ、へ、  
 用、物、や、ち、を、也、

或、一、事、之、内、全、以、訓、録、  
 全、く、真、字、書、も、し、も、古、語、を、言、も、意、も、違、  
 字、の、ま、く、に、訓、免、ば、語、を、違、へ、や、し、も、意、ハ、違、は、ま、し、と、其、

古語ハ人皆知て訓誤ニするやあるまじきや。又借字ル  
て意ハ違へども世おあまねく書るれ。人皆辨へ  
ば字も惑をゆじさや。それハ假字書ハ長を故  
ル簡約ツマヤカなる真字書の方を用ゆるなり。一事といひ一  
句といふるハあや文をわくふるのみあり。

即辭理チ見ガキハ以エ注ラ明ス意ヲ

理を意として即明意と何る意これあり。叵字ハ不可也  
と注して難と同トく用ひつり。書紀釋ふ引ふは難を假也。さそ記  
中ル種タビと此注ある中に辞理を明アカしふるはいつく  
流ナして只訓ユキるささる或教へる流の子常お多りれ

ば此も文乃乎に心得てハ少一違ゆべし。大オホ概カタ  
ふろく流ナえさあるべきあり。まご訓ユキご處を教へる流  
乃文を助きていはば。辞とは字をりて理あり意とわ  
訓を云や心得てもあるべきなり。訓ハ流あり其字乃  
意をればなり。假令トバ訓立ツ云多志とあるあざら訓  
を教へるるれども多志ハ流あり立字の意お  
まは明意とも云はるべし。されど又多く某ナニ字ヲ以テ音ヲ  
あるハ假字あるを注しあるるれば明意とは云  
がさるるべし。あふかく  
ふ當オウるべし。ま文あり。

况ヤ易キ解リ更ニ非ズ注セ

况字ハさやふ意をし。下輕く見べし。字書ル發語之  
非字ハ不の意小用ひあるなり。此例本文又書紀なるや  
ももあやし。さそ全篇對句なれば此も然るべきなり。

あるに意ハ上と對して字の對せざ依ハ易字の上ニ  
二字更字の上り下りに一字ありしが共ニ脱するに  
やあつむ。

亦於姓日下謂玖沙訶於名帶字謂多羅斯如以此之類隨本不  
改。

此文於姓玖沙訶謂日下於名多羅斯謂帶やあるべ  
まこやちり其故を玖沙訶尔日下多羅斯尔帶と本よ  
て書來するに今も改め其字を記しぞと云  
義すればなり。如此之類とはおちち長谷春日飛鳥三  
枝などなり。ちかそのぬぐひ乃みぬぐ文地名神名を

多々は古來書なり依字のあり。然るに  
神及人地名姓氏などの文字又假字なり。凡て古  
來乃をば用ひて。こやう改め伊邪那岐命  
を伊弉諾尊須佐之男命を素盞鳴尊なり。書  
かるを後世人は書紀に乃み目なれぬ。是を  
うらまをせぬ。字は心得。此記の如く伊邪  
那岐命須佐之男命なり。書をば。乃て異な  
如く思ふ。ハ。む。こやう。餘乃古書どもを  
を見よ。何れも大か。此記の字ふ似るを。書紀  
のみぞいふ。異なる。此記又餘の古書なり。出  
依久米川。侯なり。云地名も書紀ののみに  
ちや書き。乃て地名。今世りも。彼は。來目川  
古あり。今當地。乃て書來。字も。み。此記  
を同。乃て。い。か。乃。なれ。こ  
乃。書。乃。突。と。饒。あ。乃。を。思。ひ。乃。傳。し。

大抵所記者自天地開闢始以訖于小治田御世。

こは全部の始終をいひ。次こは卷々此始終をいふ。



故天御中主神以下日子波限建鷦草葺不合尊以前為上卷

神代を以て一卷とせるは、也やゆりさるるべきものか

と尊字延在木尔葺と作す。同ト云やあり。命尔尊字を

書依るや也。此記尔は美許登尔也。尊卑さか

古書也。もにも。天皇など乃大御名りも多くとわ命字を

書に。かくて書紀りは尊字也。命字を分用て。至貴曰

尊。自餘曰命と。自注あれは尊字ハ。彼撰者の新尔用初

也。書紀りゆり始まれ。見え。此記ち。や。は。つ。も。か

疑ひなきりあり。交。故。此。序。を。ち。べ。く。疑。ひ。く。後。人。の。偽

作也。物。そ。や。云。人。も。あ。れ。也。其。中。に。ふ。む。が。ろ。く。物

也。書紀り目され。後。人。の。ひ。が。ろ。く。や。な。れ。は。以。尊。字

も。其。類。あ。く。書。紀。ち。ゆ。を。見。な。れ。て。ゆ。と。写。誤。ま。る。う。真

福寺本より。命字を假り。これや正し。か。年。又。思。ふ。次

文尔。伊波礼毘古。天。皇。品。陀。は。御。世。大。雀。あ。る。皇

帝。小。治。田。あ。は。大。宮。也。各。異。尔。申。せ。れ。如。く。也。も。あ。る。色

色。よ。う。へ。く。書。依。り。て。必。し。も。あ。し。か。り。美。許。登。但。一。近

也。云。尔。此。字。を。用。ひ。あ。る。も。と。非。依。り。や。河。く。年。但。一。近

き。ほ。や。見。得。り。と。い。ふ。上。野。國。多。胡。郡。の。古。き。碑。文。此

寫しを見ゆふも。石。上。麻。呂。公。を。石。上。尊。藤。原。史。公。を。藤

原。尊。也。書。に。彼。碑。を。以。同。ト。和。銅。四。年。小。建。初。る。なり。然

也。其。の。か。み。既。く。尊。人。を。は。如。此。稱。る。也。は。可。ゆ。く。あ

と。ま。む。か。し。當。あ。る。か。く。書。紀。り。は。即。て。其。を。取。て。正。し

く。美。許。登。小。用。ひ。て。至。貴。さ。小。書。也。多。ゆ。ち。る。べ。し。然。依

を。彼。碑。な。る。尊。を。朝。臣。乃。意。尔。ソ。ム。孔。音。を。取。り。る。なり

神倭伊波禮毘古天皇以下品陀御世以前為中卷大雀皇帝

以下、小治田、大宮以前、爲下卷。

天皇御世、皇帝大宮を文をかくるあやせせり。中、  
天皇御世、皇帝を對し、御して品陀、御世まごを中卷  
世と大宮を對せ、御なり。とし、大雀、御世より下卷せしは、あつたり  
来りて、御し、ふて、殊ちる意ハ、何るべからず。中卷ハ長  
短きを以、思へば、少ハ意あり、御も見ゆ、然れども、  
然るは、何れ品陀、御世を下卷ふい、御せ、又下卷長  
くなりて、同ド、御なり。小治田、御世まご、あして、さ  
乃き、あつたり、御撰録を、阿禮が、誦習ひ、あつたり、  
録され、御撰、其ハ、御清御原、宮、天皇、御勅語、るれ、バ、小  
治田、推、の御次、岡本、官、天皇、御、ハ、彼、天皇、の大御考、命、ふ

坐り、故に、憚り、其御世まご、は及ぼし、賜ハ、ごの、あつたり

あつたり、あつたり、あつたり、記中、あつたり、見、あつたり、他、田、宮、御

あつたり、あつたり、あつたり、御子の、あつたり、御名、を、あつたり、抑、此

記、乃、あつたり、あつたり、撰者、此、新、為、を、加、る、あつたり、あつたり、あつたり、阿禮

が、誦習へ、る、あつたり、あつたり、あつたり、あつたり、あつたり、あつたり、あつたり、あつたり

あつたり、あつたり、あつたり、あつたり、あつたり、あつたり、あつたり、あつたり、あつたり

并録、三卷、謹以、獻上、臣安萬侶、誠惶、誠恐、頓首、頓首。

三卷、せ、る、あつたり、あつたり、あつたり、あつたり、あつたり、あつたり、あつたり、あつたり

和銅五年正月二十八日。

去年、九月十八日、詔命を、奉、り、あつたり、あつたり、あつたり、あつたり、あつたり、あつたり

餘あして業を終る。いかに速きなり。もどかの  
阿禮が詔乃まゝを録せる所みりして新為を加ふる  
るや乃ぬりしがゆゑなるべし。

正五位上勲五等太朝臣安萬侶 謹上

勲五等とは尋常の位階のほかに勲位として一等あり

十二等おとけりて官位令小見えたるは義解より依る

五等は正五位に相当なり。勲位は武功より太朝臣

ハ白檮原宮御宇天皇の御子神八井耳命に御末あり

委さ事ハ彼御段云依し安萬侶朝臣ハ誰子といふ

許やとれぬ。書紀天武卷多臣品治て人見え

て位ハ小錦下位ありて持統卷十年八月庚午朔甲  
午以直廣壹授多臣品治并賜物褒美元從之功與堅守  
關事とあり。此品治朝臣乃子なるべし。之思はる。さ  
て此氏天武卷朝臣位なりて後ハ多朝臣品治位見  
え。持統卷もし。臣とあるハい。直廣壹ハ  
天武御世小定然れ。四十八階乃第十尔當位  
に續紀三卷小慶雲元年正月丁亥朔癸巳正六位下太  
朝臣安麻呂授從五位下。此人此始。五卷小和銅四年  
四月丙子朔壬午正五位下太朝臣安麻呂授正五位上  
正五位下小叙死し。六卷小靈龜元年正月  
前見え。漏るる。依。甲申朔癸巳叙從四位下。七卷小同二年九月乙未為氏  
長九卷小養老七年七月庚午民部卿從四位下太朝臣  
安麻呂卒。民部卿任死し。前享年見え。さ

弘仁私記序三統理平延喜六年日本紀竟宴歌序橋  
 直幹天慶六年同竟宴歌序又忌部正通口決た<sup>カ</sup>尔<sup>ル</sup>書  
 紀を舍人親王と二人詔を奉<sup>タテマツ</sup>りて撰<sup>ヒ</sup>びりとい<sup>ハ</sup>り<sup>シ</sup>。紀續  
 尔は親王一柱乃撰<sup>ヒ</sup>て見えく安麻呂朝臣乃<sup>シ</sup>て<sup>ハ</sup>尔<sup>ハ</sup>宗  
 一<sup>ノ</sup>神名帳小大和國一市郡小社神命神社あり或云  
 此神社在<sup>リ</sup>多社東南今称<sup>ス</sup>木下社傳云祭安麻呂<sup>ノ</sup>神<sup>ニ</sup>ハ  
 是<sup>レ</sup>今按<sup>テ</sup>尔<sup>ノ</sup>彼社等四社乃<sup>シ</sup>下<sup>ル</sup>尔<sup>ノ</sup>已上<sup>ノ</sup>四神太社皇子神<sup>ニ</sup>ハ  
 式<sup>ノ</sup>尔<sup>ノ</sup>上<sup>ル</sup>さ<sup>レ</sup>れ<sup>ル</sup>多<sup>ク</sup>氏<sup>ノ</sup>の人<sup>ヲ</sup>を祀<sup>ヒ</sup>る<sup>ル</sup>之<sup>レ</sup>舊印本小  
 是<sup>レ</sup>は決<sup>シ</sup>て誠<sup>ニ</sup>尔<sup>ノ</sup>安麻呂朝臣<sup>ノ</sup>も何<sup>レ</sup>もむ<sup>ル</sup>之<sup>レ</sup>舊印本小  
 は謹上二字ハ<sup>ナ</sup>一<sup>ノ</sup>

大御代之繼繼御世御世之御子等

○ 天之御中主神

○ 高御産巢日神 别名高木神

○ 神産巢日神

此三柱神者並獨神成坐而隱身也

○ 宇麻志阿斯訶備比古遲神

○ 天之常立神

此二柱神亦獨神成坐而隱身也

上件五柱神者別天神

○ 國之常立神

○

豐雲野神

此二柱神亦獨神成坐而隱身也

○

宇比地邇神

須比智邇神

○

角杵神

活杵神

○

意富斗能地神

大斗乃辨神

○

淤母陀琉神

阿夜訶志古泥神

○

伊邪那岐神

伊邪那美神

上件自國之常立神以下伊邪那美神以前并

稱神世七代

上二柱獨神各云一代次孃十柱各合二柱云一代也

水蛭子

淡嶋

右不入御子之例

淡道之穗之狹別嶋

伊豫之二名嶋

此嶋者身一而有面四面有各名伊豫國謂愛比賣讚岐國謂飯依比古

粟國謂大宜都比賣  
土左國謂建依別

隱伎之三子嶋 亦名天之忍許呂別

筑紫嶋 此嶋亦身一而有面四每面有名筑紫國謂  
白日別豐國謂豐日別肥國謂建日向日豐

久士比涅別熊  
曾國謂建日別

伊伎嶋 亦名天比登都柱

津嶋 亦名天之狹手依比賣

佐度嶋

大倭豐秋津嶋 亦名天御虛空豐秋津振別

右八嶋合云大八嶋國

吉備兒嶋 亦名建日方別

小豆嶋 亦名大野手比賣

大嶋 亦名大多麻流別

女嶋 亦名天一根

知訶嶋 亦名天之忍男

兩兒嶋 亦名天兩屋

右六嶋

上件嶋合十四嶋

大事忍男神

石土毘古神

石巢比賣神

大戸日別神

天之吹男神

大屋毘古神

風木津別之忍男神

大綿津見神 海神也

速秋津日子神 水戸神也

速秋津比賣神 同上

沫那藝神

沫那美神

頰那藝神

頰那美神

天之水分神

國之水分神

天之久比奢母智神

國之久比奢母智神

右八柱者速秋津日子神速秋津比賣神二柱因河海持分而生神

志那都比古神 風神也

久久能智神 木神也

大山津見神 山神也

庶屋野比賣神 亦名野推神野神也

天之狹土神

國之狹土神

天之狹霧神

國之狹霧神

天之闇戶神

國之闇戶神

大戶惑子神

大戶惑女神

右八柱者大山津見神野槌神二柱因山野特別而生神

鳥之石楠船神

亦名天鳥船神

大宜都比賣神

火之夜藝速男神

亦名火之炫毘古神亦名火之迦具土神 火神也

正鹿山津見神

游騰山津見神

奧山津見神

闇山津見神

志藝山津見神

羽山津見神

原山津見神



戶山津見神

右八柱者於所殺地  
具土神之體所成神

金山毘古神

金山毘賣神

波邇夜須毘古神

波邇夜須毘賣神

彌都波能賣神

和久產巢日神

豐宇氣毘賣神

上件伊邪那美神未神避坐以前所共生坐也

泣澤女神

坐香山之畝尾木本

右於御淚所成神也

石折神

根折神

石筒之男神

甕速日神

樋速日神

建御雷之男神

亦名建布都神亦名豐布都神  
下曰伊都之尾羽張神之子

閻淤加美神

閻御津羽神

右八柱者斬迦具土神因御刀所生神也

大雷

火雷

黑雷

拆雷

若雷

土雷

鳴雷

伏雷

右八雷神者於伊邪那美神之神避坐御體所成也

衝立船戶神

道之長乳齒神

時置師神

和豆良比能宇斯能神

道侯神

飽咋之宇斯能神

奧疎神

奧津那藝佐毘古神

奧津甲斐辨羅神

邊疎神

邊津那藝佐毘古神

邊津甲斐辨羅神

右十二柱者因脫著御身之物所生神也

八十禍津日神

大禍津日神

右二柱者因夜見國之汚垢而所成神也

神直毘神

大直毘神

伊豆能賣神

右三柱者將直禍而所成神也

底津綿津見神

底筒之男命

中津綿津見神

中筒之男命

上津綿津見神

上筒之男命

右三柱綿津見神者阿曇連等之祖神也底筒之

男中筒之男上筒之男三柱者墨江三前大神也

天照大御神

月讀命

建速須佐之男命

上件十四柱神者因滌御身所生坐神也

多紀理毘賣命

亦名奧津嶋比賣命  
坐胸形之奧津宮

市寸嶋比賣命

亦名狹依毘賣命  
坐胸形之中津宮

多岐都比賣命

坐胸形之邊津宮

右三柱者與天照大御神誓坐時所生坐神也

八嶋士奴美神

母足名推神女櫛名田比賣

大年神

母大山津見神女神大市比賣

宇迦之御魂神

母同

須勢理毘賣命

大國主神之嫡妻

大國御魂神

母神活須毘神女伊怒比賣

韓神

母同上

曾富理神

母同上

白日神

母同上

聖神

母同上

大香山戶臣神

母香用比賣

御年神

母同上

奧津日子神

母天知迦流美豆比賣

奧津比賣神

亦名大戶比賣神  
母同上  
龜神也

大山咋神 亦名山末之大主神 母同上  
坐近淡海國日枝山亦坐葛野松尾

庭津日神 母同上

阿須波神 母同上

波比岐神 母同上

香山戶臣神 母同上

羽山戶神 母同上

庭高津日神 母同上

大土神 亦名土之御祖神 母同上

若山咋神 母大氣都比賣

若牟神 母同上

若沙那賣神 母同上

彌豆麻岐神 母同上

夏高津日神 亦名夏之賣神 母同上

秋毘賣神 母同上

久久牟神 母同上

久久紀若室葛根神 母同上

布波能母遲久奴須奴神 母大山津見神女木花知流比賣

深淵之水夜禮花神 母淤迦美神女日河比賣

淤美豆奴神 母天之都度閉知泥神

天之冬衣神 母布怒豆怒神女布帝耳神

大國主神

亦名大穴牟遲神 亦名葦原色許  
男神 亦名八千矛神 亦名字都  
志國玉神 母刺國大神 女刺國若  
比賣 兄弟八十神坐

木俣神

亦名御井神  
母稱羽之八上比賣

阿遲鉏高日子根神

母多紀理毘賣命  
謂迦毛大御神

高比賣命

亦名下光比賣命  
母同上

事代主神

母神屋楯比賣命

鳥鳴海神

母八鳴牟遲神女鳥耳神

建御名方神

國忍富神

母日名照額田毘道男伊許知迹神

速甕之多氣佐波夜遲奴美神

母葦那陀迦神亦  
名八河江比賣

甕主日子神

母天之甕主神女前玉比賣

多比理岐志麻流美神

母淤加美神女比那良  
志毘賣

美呂浪神

母比比羅木之其花麻豆美神女活  
玉前玉比賣神

布忍富鳥鳴海神

母敷山主神女青沼馬沼神  
比賣

天日腹大斜度美神

母若晝女神

遠津山岬多良斯神

母天狹霧神女遠津待根神

正勝吾勝勝速日天之忍穗耳命

天之菩卑命

天津日子根命

凡川内國造額田部湯坐連木國造倭田中直山代國造

馬來田國造道尻岐閉國造周芳國造倭淹知造高市縣主蒲生縮寸三枝部造等之祖

活津日子根命

熊野久須毘命

右五柱者與速須佐之男命宇氣比坐時所

成坐神也

建比良鳥命

出雲國造无邪志國造上菟上國造下菟上國造伊自牟國造津嶋縣直遠江國造等之祖

天火明命

御田高木神御女萬幡豐秋津師比賣命

天邇岐志國邇岐志天津日高日子番能邇邇藝命

御母同上

火照命

御母大山津見神女神阿多都比賣亦名木花之佐久夜毘賣 隼人阿多君之祖

火須勢理命

御母同上

火遠理命

亦御名天津日高日子穗穗手見命御母同上

天津日高日子波限建鷦普草普不合命

御母綿津見神女豐玉毘賣命

五瀨命

御母綿津見神女玉依毘賣命

稻米命

御母同上

御毛沼命

御母同上

○

神倭伊波禮毘古命

後御謚神武天皇

亦御名若御毛沼命亦御名豐御毛沼命  
御母同上坐畝火之白檮原宮治天下也  
御年百三十七御陵在畝火山之北方白檮  
尾上

多藝志美美命

伎須美美命

右二柱御母阿多之小荷君妹阿比良比賣

日子八井命

茨田連手嶋連之祖

神八井耳命

意富臣小子部連坂合部連火君  
大分君阿蘇君筑紫三家連雀部  
臣雀部造小長谷造都祁直伊余國造利野國  
造道與石城國造常道仲國造長狹國造伊勢  
船木直尾張州羽  
臣嶋田臣等之祖

○

神沼河耳命

後御謚綏靖天皇

又稱建沼河耳命坐葛城高岡宮治天下也  
御年四十五御陵在衛田岡  
右三柱御母美和之大物主神女比賣多多良  
伊須氣余理比賣命

○

師木津日子玉手見命

後御謚安寧天皇

坐片塩浮穴宮治天下也御年四十九  
御陵在畝火山之美富登  
御母師木縣主之祖河俣毘賣

常根津日子伊呂泥命

後御謚懿德天皇

○

大倭日子鉏支命

坐輕之境岡宮治天下也御年四十五  
御陵在畝火山之真名子谷上

師木津日子命

○古事記傳二

○三十七



右三柱御母河俣毘賣之兄縣主殿延之女  
阿久斗比賣

某命

伊賀須知之稻置那婆理之  
稻置三野之稻置等之祖

和知都美命

坐淡道之御井宮

蠅伊呂泥

亦名意富夜麻登久迹阿禮比賣命  
大倭根子日子賦斗迹天皇之妃

蠅伊呂杼

同天皇之妃

御真津日子訶惠志泥命

後御謚孝昭天皇

坐葛城掖上宮治天下也

御年九十三

御陵在掖上博多山上

多藝志比古命

血沼之別多遲麻之竹  
別葦井之稻置等之祖

右二柱御母師木縣主之祖賦登麻和訶比賣  
命亦名飯日比賣命

天押帶日子命

春日臣大宅臣粟田臣小野臣  
柿本臣壹比葦臣大坂臣阿那

臣多紀臣羽栗臣知多臣牟耶臣都怒山臣伊  
勢飯高君壹師君迹淡海國造等之祖

大倭帶日子國押人命

後御謚孝安天皇

坐葛城室之秋津嶋宮治天下也

御年百二

十三 御陵在玉手岡上

右二柱御母尾張連之祖奧津余曾之妹余曾  
多本毘賣命

大吉備諸進命

大倭根子日子賦斗邇命

後御謚孝靈天皇

坐黑田廬戶宮治天下也

御年百六

御陵在片岡馬坂上

右二柱御母大御父天皇之御姪忍鹿比賣命

大倭根子日子國玖琉命

後御謚孝元天皇

坐輕之塚原宮治天下也

御年五十七

御陵在劔池之中岡上

御母十市縣主之祖大目之女細比賣命

千千速比賣命

御母春日之千千速真若比賣命

夜麻登登母母曾毘賣命

日子刺肩別命

高志之利波臣豐國之國前臣五百原君角鹿海直等之祖

比古伊佐勢理毘古命

亦名大吉備津日子命吉備上道臣之祖

倭飛羽矢若屋比賣命

右四柱御母意富夜麻登久迹阿禮比賣命

日子寤間命

針間牛鹿臣之祖

若日子建吉備津日子命

吉備下道臣笠臣等之祖

右二柱御母蠅伊呂孺

伊那毘能大郎女

大帶日子淑斯呂和氣天皇之妃

伊那毘能若郎女

同天皇之妃

大毘古命

少名日子建猪心命

若倭根子日子大毘毘命

後御謚開化天皇

坐春日之伊邪河宮治天下也

御年六十

三 御陵在伊邪河之坂上

右三柱御母穗積臣等之祖

比古布都押之信命

御母内色許男命之女伊賀迦色許賣命

建波邇夜須毘古命

御母河内青玉之女波迹夜須毘賣

味師内宿禰

母尾張連祖意富那毘之妹葛城之高千那毘賣山代内臣之祖

建内宿禰

母木國造之祖宇豆比古之妹山下影日賣

波多八代宿禰

波多臣林臣波美臣星川臣淡海臣長谷部君等之祖

許勢小柄宿禰

許勢臣雀部臣輕部臣等之祖

蘇賀石川宿禰

蘇我臣川邊臣田中臣高向臣小治田臣櫻井臣岸田臣等之祖

平群都久宿禰

平群臣佐和良臣馬御檄連等之祖

木角宿禰

木臣都奴臣坂本臣等之祖

久米能摩伊刀比賣

怒能伊呂比賣

葛城長江曾都毘古

玉手臣的臣生江臣阿藝那臣等之祖

若子宿禰

江野間臣之祖

石之日賣命

大雀天皇之大后

葦田宿禰

黑比賣命

大江之伊邪本和氣天皇之妃

建沼河別命

阿倍臣之祖

比古伊那許志別命

膳臣之祖

御真津比賣命 御真木入日子印惠天皇之大后

比古由牟須美命

御母且波之大縣主由碁理之女竹野比賣

大筒木垂根王

讚岐垂根王

以二王之女五柱坐也

迦具夜比賣命 伊久米天皇之妃

御真木入日子印惠命 後御謚崇神天皇

坐師木水垣宮治天下也 御陵在山邊道勾之岡上 御年百六十八

御真津比賣命

右二柱御母伊賀迦色許賣命

日子坐王

御母丸迹臣之祖日子國意祁都命之妹意祁都比賣命

建豐波豆羅和氣王 道守臣思海部造御名部造楢羽忍海部丹波

之竹野別依網之阿毘古等之祖 御母葛城之垂見宿禰之女鷗比賣

大俣王

小俣王 當麻勾君之祖

志夫美宿禰王 佐佐君之祖

右三柱母山代之菴名名津比賣亦名荊幡 戶辨

曙立王 伊勢之品遲部君伊勢之佐那造等之祖

菟上王 比賣陀君之祖

沙本毘古王 日下部連甲斐國造等之祖

袁邪本王 葛野之別近淡海蛟野之別等之祖

沙本毘賣命 亦御名佐波遲比賣伊久米天皇之大后

室毘古王 若狹之耳別之祖

右四柱母春日建國勝戶賣之女沙本大閤見戶賣

丹波比古多多須美知能宇斯王

水穗之真若王 近淡海之安直之祖

神大根王 亦名八瓜入日子王 三野國造本巢國造長幡部連等之祖

水穗五百依比賣

御井津比賣

右五柱母天之御影神女息長水依比賣

兄比賣

弟比賣

比婆須比賣命 伊久米天皇之大后

真砥野比賣命

弟比賣命

朝廷別王 三川之穗別之祖

右四柱母丹波之河上之摩須郎女

○丹波美知能宇斯王之女伊邪河官段所舉三柱如上也然玉垣官段舉四女或

二女或三女而其名亦各有異同不合如  
書紀則五女而其中亦有異者故玉垣宮  
段所舉與此異其名  
者今皆別在出焉

沼羽田之入毘賣命 伊久米天皇之妃

阿邪美能伊理毘賣命 同天皇之妃

兄比賣

歌凝比賣命

○右四柱玉垣宮段散出而與伊邪河宮  
段其名異者也

山代之大筒木真若王

比古意須王

伊理泥王

右三柱田袁祁都比賣命

泥能阿治佐波毘賣

迦邇米雷王

世泥能阿治佐波毘賣

息長宿禰王

世丹波之遠津臣之女高材比賣

息長帶比賣命

後御謚神功皇后  
帶中津日子天皇之大后

虛空津比賣命

息長日子王

吉備品遲君針間  
阿宗君等之祖

右三柱御母葛城之高額比賣

大多牟坂王

多遲摩國造之祖

母河俣稻依毘賣

豐木入日子命

上毛野君下毛野君等之祖

豐鉏入日賣命

拜祭伊勢大神之官

右二柱御母木國造荒河刀辨之女遠津年魚  
目目微比賣

大入杵命

能登臣之祖

八坂之入日子命

沼名木之入日賣命

十市之入日賣命

右四柱御母尾張連之祖意富阿麻比賣

八坂之入日賣命

大帶日子淤斯呂和氣天皇之  
后

伊玖米入日子伊沙知命

後御謚無仁天皇

坐師木玉垣宮治天下也  
御陵在菅原之御立野中

伊邪能真若命

國片比賣命

千千都久和比賣命

伊賀比賣命

倭日子命

右六柱御母大毘古命之女御真津比賣命

本牟智和氣命

御母沙本毘古命之妹佐波遲比賣命

印色之入日子命

大帶日子淤斯呂和氣命

後御謚景行天皇

坐纏向之日代官治天下也 御年百三十七  
御陵在山邊之道上

大中津日子命

山邊之別三枝之別稻木之別  
阿太之別尾張國之別三野之

別吉備之石无之別許呂母之別高  
巢鹿之別飛鳥君牟禮之別等之祖

倭比賣命

拜祭伊勢大神宮

若木入日子命

右五柱御母且波比古多多須美知能宇斯王  
之女氷羽洲比賣命

沼帶別命

伊賀帶日子命

右二柱御母氷羽洲比賣命之弟沼羽田之入  
毘賣命

伊許波夜和氣命

沙李穴太部之別之祖

阿邪美都比賣命

嫁稻瀬毘古王

右二柱御母沼羽田之入日賣命之弟阿邪美  
能伊理毘賣命

袁邪辨王

御母大筒木垂根王之女迦具夜比賣命

落別王

小月之山君三川  
之衣君等之祖

五十日帶日子王

春日山君高志池君  
春日部君等之祖

伊登志別王

右三柱御母山代大國之淵之女荊羽田乃辨



石衝別王

羽咋君三尾君等之祖

石衝毘賣命

亦名布多遲能伊理毘賣命  
倭建命之后

右二柱御母大國之洲之女弟苺羽田刀辨

擲角別王

茨田下連之祖

大碓命

守君大田君嶋田君等之祖

小碓命

亦御名倭男具那命 亦稱倭建命

倭根子命

神櫛王

木國之酒部阿比古  
宇陀酒部等之祖

右五柱御母若建吉備津日子命之女針間  
之伊那毘之大郎女  
後御謚成勢天皇

若帶日子命

坐近淡海之志賀高穴穗宮治天下也  
御年九十五 御陵在沙紀之多他那美

五百木之入日子命

押別命

五百木之入日賣命

右四柱御母八尺八日子命之女八坂之  
入日賣命

品陀真若王

母尾張連之祖建伊那陀宿禰  
之女志理都紀斗賣

高木之入日賣命

品陀天皇之妃

中日賣命

同天皇之后

弟日賣命

同天皇之妃

和訶奴氣王

御母穗積臣祖建忍山垂振之女弟財郎女

豐石別王

沼代郎女

右二柱御母妾

沼名木郎女

香余理比賣命

若木之入日子王

吉備之兄日子王

高木比賣命

弟比賣命

右六柱御母妾

豐國別王

日向國造之祖

御母日向之美波如斯毘賣

真若王

日子人之大兄王

右二柱御母伊那毘能大郎女之弟伊那毘能若郎女

大枝王

御母倭建命之曾孫須賣伊呂大中日子王之女訶具漏比賣

大名方王

大中津比賣命

帶中津日子天皇之妃

右二柱母父王之庶妹銀王

押黑之兄日子王

母神大根王之女兒比賣  
三野之宇泥須別之祖

押黑身日子王

母同王之女弟比賣  
牟宜都君之祖

帶中津日子命

後御謚仲哀天皇

坐穴門之豐浦宮及筑紫訶志比官治天下也

御年五十二 御陵在河内惠賀之長江

御母伊玖米天皇御女布多遲能伊理毘賣命

若建王

御母弟橘比賣命

須賣伊呂大中日子王

母飯野真黑比賣

迦具漏比賣命

母淡海之榮野入杵之女榮野比賣  
大帶日子天皇之妃

稻依別王

犬上君建部君等之祖

御母近淡海之安國造之祖意富多年和氣之

女布多遲比賣

建貝兒王

讚岐綾君伊勢之別登袁之別麻佐首宮首之別等之祖

御母吉備臣建日子之妹大吉備建比賣

足鏡別王

鎌倉之別小津石代之別漁田之別等之祖

御母山代之玖玖麻毛理比賣

息長田別王

御母一妻

杵俣長日子王

飯野真黑比賣

息長真若中比賣 品陀天皇之妃

弟比賣 又曰百師木伊呂辨 亦名弟日賣真若比賣命

香坂王

忍熊王

右二柱御母大江王之女大中津比賣命

品夜和氣命

品陀和氣命

後御謚應神天皇

亦御名大鞆和氣命 坐輕嶋之明宮治天下也 御年百三十 御陵在川内惠賀之裳伏岡 右二柱御母息長帶比賣命

額田大中日子命

大山守命

伊奢之真若命

大原郎女

高目郎女

右五柱御母品陀真若王之女高木之入日賣命

木之荒田郎女

大雀命

後御謚仁德天皇

坐難波之高津宮治天下也 御年八十三

根鳥命

右三柱御母品陀真若王之女中日賣命

中日子王

伊和嶋王

右二柱御母三腹郎女

阿倍郎女

阿具知能三腹郎女

木之菟野郎女

三野郎女

右四柱御母品陀真若王之女第日賣命

宇遲能和紀郎子

八田若郎女 大雀天皇之妃

女鳥王

右三柱御母丸迹之比布禮能意富美之女宮主矢河枝比賣

宇遲之若郎女 大雀天皇之妃

御母矢河枝比賣之弟袁那辨郎女

若沼毛二俣王

御母吹俣長日子王之女息長真若中比賣

速總別命

御母櫻井田部連之祖嶋垂根之女糸井比賣

大羽江王

小羽江王

幡日之若郎女

右三柱御母日向之泉長比賣

川原田郎女

玉郎女

忍坂大中比賣

登富志郎女

迦多遲王

右五柱御母迦具漏比賣

伊奢能麻和迦王

御母葛城之野伊呂賣

大郎子

亦名意富富舒王

三國君波多君息長君坂田君酒人君  
山道君筑紫之米多君布勢君等之相  
忍坂之大中津比賣命  
男淺津間若子宿祢天皇之后

田井之中比賣

田官之中比賣

藤原之琴節郎女

取賣王

沙彌王

右七柱母昨俣長日子王之女百師木伊呂  
辨亦名第日賣真若比賣命

宇非王

一書曰私斐王

母中斯和命

汗斯王

書紀曰夢野人王

母牟義都國造伊自牟良君之女久留比賣  
命

○右宇非王汗斯王者記不載之令以  
書紀釋所引上官記補焉

大江之伊邪本和氣命

後御謚履中天皇

坐伊波禮之若櫻官治天下也 御年六十四

御陵在毛受

墨江之中津王

瓊之水齒別命

後御謚及正天皇

坐多治比之柴垣官治天下也 御年六十  
御陵在毛受野

男淺津間若子宿禰命

後御謚允恭天皇

坐遠飛鳥官治天下也 御年七十八

御陵在河內之惠賀長枝  
右四柱御母葛城之曾都毘古之女石之  
比賣命

波多毘能大郎子

亦名大日下王

波多毘能若郎女

亦名長日比賣命  
亦名若日下命

大長谷天皇之大后  
右二柱御母日向之諸縣君牛諸之女  
髮長比賣

目弱王

母男淺津間若子宿祢天皇之御女  
長田大郎女

木梨之輕王

長田大郎女

境之黑日子王

穴穗命

後御謚安康天皇

坐石上之穴穗官治天下也

御年五十六

御陵在菅原之伏見岡

輕大郎女

亦名衣通郎女

八瓜之白日子王

大長谷若建命

後御謚雄略天皇

坐長谷朝倉官治天下也  
御陵在河内之多治比高鷗

御年百廿四

橘大郎女

酒見郎女

右九柱御母意富本杼王之妹忍坂之大  
中津比賣命

白髮大倭根子命

後御謚清寧天皇

坐伊波禮之甕栗宮治天下也

御陵書紀曰河内坂門原

若帶比賣命

右二柱御母都夫良意富美之女韓比賣

春日大郎女

意富祁天皇之后

御母書紀曰春日  
和珥臣深目女童女君

甲斐郎女



都夫良郎女

右二柱御母丸迹之許基登臣之女都怒郎女

財王

多訶辨郎女

右二柱御母同臣之女弟比賣

市邊之忍齒王

御馬王

青海郎女

又曰忍海郎女亦御名飯豐王坐葛城忍海之高木角刺宮也右三柱御母葦田宿祢之女黑比賣命

意富祁命

後御謚仁賢天皇治天下顯宗天皇之後

袁祁之石巢別命

後御謚顯宗天皇治天下仁賢天皇之前

坐石上廣高宮治天下也御陵書紀曰埴生坂本坐近飛鳥宮治天下也御陵在片岡之石坏岡上右二柱御母書紀曰叢臣女黃媛

高木郎女

財郎女

久須毘郎女

手白髮郎女

橘之中比賣命

小長谷若雀命

表本孖天皇之大后建小廣國押楯天皇之后後御謚武烈天皇

坐長谷之列木宮治天下也  
御陵在片岡之石坏岡

真若王

右七柱御母大長谷天皇之御女春日大郎女但  
橘之中比賣命記不見至檜桐宮段始見御母未  
詳今據書紀云

春日山田郎女

御母九迹臣日爪之女糠若子郎女

袁本杼命

後御謚繼體天皇

坐伊波禮之玉穗宮治天下也 御年四十三  
御陵在三嶋之藍  
御母書紀曰活目天皇七世孫振媛上宮記同  
之乎波智君之女

大郎子

出雲郎女

右二柱御母三尾君之祖若比賣

廣國押建金日命

後御謚安閑天皇

坐勾之金箸宮治天下也 御年書紀曰七十  
御陵在河内古市高屋村

建小廣國押楯命

後御謚宣化天皇

坐檜桐之廬入野宮治天下也 御年書紀曰  
七十三 御陵書紀曰身挾桃花鳥坂上  
右二柱御母尾張連之祖凡連之妹目子郎女

石比賣命

天國押波流伎廣庭天皇之后

小石比賣命

同天皇之妃

倉之若江王

○古事記傳二

○五十五

右三柱御母意富祁天皇之御女橘之中比賣命

火穗王 志比陀君之祖

惠波王 韋那君多治比君等之祖

右二柱御母川内之若子比賣

天國押波流岐廣庭命 後御謚欽明天皇

坐師木嶋大官治天下也 御陵書紀曰檜隈坂合

御母意富祁天皇之御女手白髮命

佐佐宜郎女 拜伊勢神宮

御母息長真手王之女麻組郎女

神前郎女

茨田郎女

白坂活日郎女

小野郎女 亦名長目比賣

右四柱御母坂田大俣王之女黑比賣

大郎女

丸高王

耳王

赤比賣郎女

右四柱御母三尾君加多夫之妹倭比賣

若屋郎女

都夫良郎女

阿豆王

右三柱御母阿倍之波延比賣

八田王

沼名倉太玉敷命

後御謚敏達天皇

坐他田宮治天下也  
御陵在川内科長

笠縫王

右三柱御母檜垣天皇之御女石比賣命

石上王

御母同天皇之御女小石比賣命

春日山田郎女

麻呂王

宗賀之倉王

右三柱御母春日之日爪臣之女糠子郎女

橘之豐日命

後御謚用明天皇

坐池邊宮治天下也  
御陵在石村掖上後遷科長中陵

石柁王

足取王

豐御食炊屋比賣命

後御謚推古天皇  
治天下崇峻天皇之後

沼名倉太玉敷天皇之大后坐小治田宮  
治天下也御陵在大野岡後遷科長大陵

麻呂古王

大宅王

伊美賀古王

山代王

大伴王

櫻井之玄王

麻奴王

橘本之若子王

杼泥王

右十三柱御母宗賀之稻目宿祢大臣之女  
岐多斯比賣

馬木王

葛城王

間人穴太部王

橘之豐日天皇之后

三枝部穴太部王

亦名須賣伊呂杼

長谷部若雀命

後御謚崇峻天皇

治天下推古天皇之前

坐倉椅柴垣官  
御陵在倉椅岡上

右五柱御母岐多志比賣命之姨小兒比賣

多米王

御母稻目宿祢大臣之女意富藝多志比賣

上官之麿戸豐聰耳命

久米王

植粟王

茨田王

右四柱御母間人穴太郎

當麻王

須賀志呂古郎女

右二柱御母當麻之倉首比呂之女飯女之子

靜貝王

亦名貝鮪王

竹田王

亦名小貝王

小治田王

葛城王

宇毛理王

小張王

多米王

櫻井玄王

右八柱御母豐御食炊屋比賣命

布斗比賣命

寶王

亦名糠代比賣命又曰田村王  
日子人太子之妃

右二柱御母伊勢大麻首之女小熊子郎女

忍坂日子人太子

亦御名麻呂古王

坂騰王

宇遲王

右三柱御母息長真手王之女比呂比賣命

難波王

桑田王

春日王

大俣王

右四柱御母春日中若子之女老女子即女

坐岡本官治天下之天皇

後御謚舒明天皇

中津王

多良王

右三柱御母田村王亦名糠代比賣命

智奴王

桑田王

右二柱御母漢王之妹大俣王

山代王

笠縫王

右二柱御母櫻井玄王

